

長野式臨床研究会
平成 19 年 第 9 期 マスタークラス 大阪セミナー Q & A
第 1 回 19 年 1 月 28 日分 講師 長野康司

長野式臨床研究会ホームページ <http://www.naganoshiki.jp/>

質問 1 症例の中で、「扁桃処置」の施灸が 7 点ではなく、4 点にしたのは？

この患者はあまりお灸をしたことがなく、最初から 7 点では多いと思ったので、上下のバランスを取りながら 4 点にした。

質問 2 この時、「手三里」ではなく、「曲池」にしたのは？

最近出だした症状なので「曲池」を使った。
一概には言えないが、急性時は「曲池」、慢性時には「手三里」としてもよいが、臨床ではアバウトな部分も大事である、四角四面にならないように。

質問 3 この曲池を使うときに「曲池 3 点」を使っていいのでしょうか？

特に「左曲池 3 点」は、神経疲労の時に使用する、この時の頸肩の張りにも効果がある。この部は「大腸経」にあたり、神経系の反応が出やすい。

質問 4 左曲池 3 点は、右には施術しないのですか？

左は「気」、右は「血」なので、神経疲労の場合、左曲池 3 点だけでよい。

質問 5 ヘルペスの気水穴処置は陽経が多いのですが、陰経は診ないのですか？

基本的に罹患している経絡は陽経が多いので、陽経を主に使います。
症例 3. の様に、全部に反応がある場合は陰陽共に診ていきます。
三陰、三陽総て反応が出ているときは、「肺経、腎経」の気水穴を使います。

質問 6 症例 5. の施灸の数が、気水穴 8 点、扁桃処置 7 点、全部で 15 点になりますが、多くはないのでしょうか？

ヘルペスの場合、免疫強化が大前提ですので、扁桃処置は外せません、7 点全部やってもいいです。そして罹患経絡も治療に必要となります。

質問 7 罹患部が右なら、治療点も右だけでいいのですか？

殆んど片側だけに発症しますので、罹患部と同側だけです。両方使うことはあまりありません。

質問 8 6年前より発症した坐骨神経ヘルペスを、経絡に対して気水穴の施灸を1年位治療しているのですが、繰り返してしまい治りにくいのですが、他に何が必要ですか？

免疫力強化が重要になってきます。
他に既往や、薬に対しての治療も大事です。
治りにくい場合は何か大事なものがぬけていることが多いので、診立て（所見）を再検討してください。
「気水穴」「扁桃処置」「瘀血」等。

質問 9 所見により治療して、総ての反応消失で治療の見切りとするのですか？

治療をして、少しでも症状が楽になっていけば、治っていきます。
反応も減っていけばいいです、全部取れるというものではありません。
人によって、脈の変化がすぐに現れる人や、変わらない人と様々です、少しでも変化が出てくれば体がいい方向に舵を切ったわけです。

質問 10 「腹」と「脈」、どちらを重視して取ればいいですか？

腹と脈の取れ方も患者の状態によって違います、変化が大事になってくるので、どちらも重要と考えてよい。

質問 11 「瘀血処置」の「至陽」の雀啄は、両方やった方が良いでしょうか？

両側やります。

質問 12 実技の中で、「虚脈」で「中脈」が乏しいと言っていましたが、「胃の気3点」をやらなくて良いのでしょうか？

脈と腹が違えば、腹が優先。この患者の場合、脈は虚、腹は実ですので、腹の反応に沿って治療をしますので、所見に則した処置で脈が変わってきたのです。もし、腹が虚なら「胃の気3点」をやっていいわけです。

治療上の注意点、まとめ

- * ヘルペスは、免疫力が低下した時に発症している為、免疫強化「扁桃処置」が不可欠である。
- * ヘルペスの治療点は、罹患している経絡の循経（陽明、太陽、少陽）「気水穴」への施灸が不可欠である。
例）胃経の罹患があれば同じ陽明経の大腸経と併せた気水穴に施灸。
- * ヘルペスは「実証」にあたるので、「脉」「腹」の反応が同じ「実」であれば「順」で、治り易い。反対に「逆証」の場合は、治癒に時間がかかる。
- * ヘルペスは殆んど片側に発症するので、気水穴の施灸点も片側でよい。
- * 「気水穴処置」は、五行論を利用しており、「火穴」に対して「気（金）穴」と「水穴」は相剋関係に当たり、五行論を証明するものである。
- * 治療前、治療中、治療後、そして2回目、3回目の治療時、脉が好転してきたら効果が出てきている、そして症状も緩和されてきている。
- * 治療には、「生活指導」も怠ってはいけない。
- * 「瘀血」がある場合、「扁桃」の関係が深いと考えてよい。
- * 刺鍼後、「鍼を捻鍼」している方がみえますが、筋繊維に絡まることもあるので、雀啄の方が捻鍼より気の流れが良くなり易い。
- * 「三焦経」・・・抑制させる効果がある
「心包経」・・・促す効果がある
- * 脊椎間が「開いている場合」椎間に施灸。
脊椎間が「狭くなっている場合」横V字椎間刺鍼か、皮内鍼。
- * 昨日、今日で発症したものは1回で取れ易い。
1年以上の慢性化したものは時間がかかるが、1～2回の処置で変化が出てれば治癒に向かい患者も納得する。
- * 治療時間は、30分～1時間以内で「診断、治療、確認」、この位のほうが、患者は疲れにくい、1～2時間の治療時間では、疲れてしまう。
- * 「脉が実で腹が虚」又は、「脉が虚で腹が実」は「逆証の脉」で治りにくい。
（この「逆証の脉」の場合は、「腹」を重視して処置を考える）
「脉が実で腹も実」又は、「脉が虚で腹も虚」は「順」で治り易い。
- * 切皮は、示指の第1関節の横紋で弾入すると、比較的柔らかく痛みが少ない。